



ラオエアのポスター。路線図・オフィス所在地。バンコクにもあるが例の場所。ベトナム航空が乗り入れている。



中央政府要人の顔写真。サチによると何処にでも掲示されているとか。この感覚は理解に苦しい。



白紙に手書きの発着表



赤十字社の活動PRとドネイションボックス。



待合室の風景



←2006のワールドカップ
出場各国のイレブン

搭乗手続きカウンター →



またしても同型機現る。記念に撮っておこう。もしかして Lao Air の保有機は単数？そんなこともなからうが、使い回しのピストンかと思える。信頼性の極めて高い機体と言うことにしておこう。機はシェンクアンの大地を離陸、「大都会」ピエンチャンを再び、眼下に見る。ピエンチャン空港に着陸。40分の飛行。



ビエンチャン空港で、同行者の知り合いであるTさん（ラオス人）と「M」さん（ビエンチャン在住日本人）の出迎えを受け、投宿するチャンタパンヤホテルに送られる。チェックイン後、ラオス風焼き肉店で食事をとる。ジギスカン鍋のひさしの部分の彫りこみが深く、ここに薄味のたれを流し込み、野菜を煮る、ハットの部分で肉を焼く方式のものである。

牛肉を注文、このタンがなかなかの美味。日本で言うタンより小ぶりのものであるが、旨い。モンの村でよく見た、小型の牛のものではないかと思われる。何回もお変わりをすることに。

最初、「M」さんが会話をリードしたが、途中からTさんの男友達Kさんが同席することに。男友達と言うが事実上、生活を共にしている風である。

かれは、Lao Telecomの職員であるようだ。Tさんは地元の大学を終えて、ラオス郵政省（ラオポスト）の建築関係の技術職員ということ。日本語も少し勉強を始めていると言う。

いわば、ラオスの知識人階層の二人である。彼らのものの考え方などが垣間見え、大変、興味深い会食になった。

ラオピア10本を空にすることになる。

話のはずみで彼が「お父さんがラオスで事業を始めるときには、お手伝いしますよ」の発言があった。すかさず、「それは、ラオス人自身が業をおこすべきである」「苦難の歴史を思うとき、ラオス人自身が繁栄する権利がある」旨の発言をすると、何故か、男性が気色ばんだのが印象的であった。何故なのか、未だにわからない。

「もしものこと、その時にはのこを言っているのですよ」と「M」さんがことばを遮ったので、それ以上の会話にならずに終わったが、Tさんがポツリと「日本の広島とおなじですよ」の意味の発言をした。

この二人に明日はタイ国境まで車で送ってもらい、お土産まで持たせてもらうことになる。

車には、彼ら二人が育てている里子も同乗していた。



本日を最後に、農村社会から離れる。ここで、農村の印象を少し、包括的に補完しておきたいと思う。高床式の農家の居宅。床下や居宅周辺に鶏、アヒル、七面長、ハト、豚などのバラエティーに富んだ中小家畜、さらにバナナ、やし、サトウキビの食用植物、場合によっては綿の木などの工芸作物や自給用野菜作。こうした農家が5～6家族から大きな場合でも20家族までが集落を形成している。その集落の周辺には水田が広がっている。集落規模の大小は水が確保できる耕作可能な水田面積の大小によって決定されている。と言うのが一般的な農村集落形成であり、これが地域農業の生産の基礎的な単位になっている。

効率的な水利用が必要とされる水稲作を基本とした農業生産は他と無関係に個別経営が存立できない。

バンビエンからルアンプラバンにかけての山の地域は山での狩猟や採集、焼き畑のバナナなどの水を要しない畑作が中心になるところから少数点在の集落形成になるのだろう。実際、単独で住まいする住居もみた。

水田作を中心とする集落には必然的に共同体としての機能が出現する。灌漑水路の管理、共同利用の穀物貯蔵倉庫、村人総出の農家の建築の様子、田越しの灌漑方式、牛を買う者と水稲作を行う者の相互補完関係などが見られた。田植えや収穫作業など労働力が集中して必要な生産過程では労力調整機能があるのかな？雨季の農村もみてみたいものだ。

(土地の所有権や耕作権が如何なものか、中世から近世にかけての王国の繁栄を支えた産業は何であったのか、その徴税方法は、地主制は存在したのか、今、国家がどんな形でかわっているのか、農業の集団化を凶ろうとしたことがあるやに聞かぬが・・・これが重要なところだが、確かめられなかった。FAOのおばさんなら知っていたかも知れない。)

農業の生産性の確保のためには、個別経営の競争原理を基本として、不合理な生産過程は協同化・集団化が基本と思う。

酒造りや織物は原始において、各農家で自給的に行われていたものと思われるが、我々の感覚から言えば微少のものであっても、施設投資には、其れなりの資本蓄積が必要であるし、知識・工夫する能力などが必要なところから、分化して村の中において業として発展したのかも知れない。

我々が見た酒造りのビレッジ、織物のビレッジ、紙すきのビレッジなどはそれらが、ツーリズムと結びついて、これをビジネスチャンスとして活かすことによって、一層発展したものと考えられる。

こうした村に於いては、この経済活動から取り残された農家もあるように見た(単にそれらの者の住居が他と比較して粗末な事からの想像にしか過ぎないが)。こうして、観光地周辺では所得を求めてサービス業へ就労する農家婦人が出現していることなどもあり、同質的は農村集落のあり方が少しずつ変化を見せている。

おおげさに言えば、農民層の分解現象の始まりである。違う言葉で言えば競争原理の導入の始まりである。

逆に言えば、農業生産の場面においても、観光スポット周辺では小規模ながら商品生産農業の条件が生じている。その萌芽がみられる。(コーヒー生産は南部地域であるようだ。これも一度見てみたい)

集落が協同して(共同と協同は大きな意味のちがいがあ)これらの農業生産ができないのか?と思う。

中国の二の舞は踏む必要がない。Laos, P. D. R. である。中央政府の理念に基づいた指導性とそれを受け止めて展開する起業精神旺盛なオルガナイザーが求められる。人材育成が極めて重要な課題と感ぜられる。

農家住居周辺の畜産は驚愕に値する。多様な品目。そのすべてが在来種。いかにも粗食に耐え、病気には強そう、しかも食味は優れていると感ぜられる。豚の三角形の首輪の発想は優れた飼養管理方法である。

放し飼いにしながら、家畜の動線管理ができるなんて。しかし、生産性観点からは目を覆うばかりである。しかし、商品価値競争力観点からは付加価値になる。負けないものである。商品化する仕組みを作る能力があるかないかが問われる。

マーケティングとそれに対応する生産体制の確立である。

この地域は飢えることのない地域であるとの印象が強い。かつて、ベトナム戦争当時、しきりにメディアに流された映像に、北ベトナム軍の自転車部隊が荷台に糧末を振り分け荷物にして、南の前線に向かって、ホーチミンルートを下る様子が映し出されていたものだ。この糧末が自発的に解放軍に対する支援の証として提供されたものか、地域の農村集落から略奪したものかが議論になったことを思い出す。

アメリカ当局筋からは「北ベトナム軍は力で村々を共産化し、食料を略奪して、住民は飢えに苦しんでいる。」趣旨の喧伝がなされたものだ。事実、アメリカ軍当局はこの地域の農業生産力をミス判断していたのかも知れない。しかし、今認識するに、労働生産性観点からは、議論にもならないにしても、この農業生産体制は土地生産性においては、相当のものであることが理解できる。全ての農村地域で十分満たされているといえないにしても、地域によっては、自らの穀物を自給した上で、相当の余剰が出る筈である。

少々の状況変化では崩壊する農業ではないと感じる。しぶとく生き残る農業である。

解せないことがある。それは水である。石灰岩の山が保水して豊かに流れた地域は別にしても、乾季には十分な水が確保するのが難しい筈である。保水力を十分に有する森林にも見えないし、ましてや山に雪を抱える地域ではない。数百年にわたって農民的知恵(技術)の蓄積がなされている(と見える)。そのように農業をやって来ているにも拘らず、水については自然のなすがままとも言える状況である。それは、乾季にも水の流れる村落に於いても効率よく利用されているとは思えない。雨季の水はメコンが海へ運ぶだけである。人の手がかけられたファームポンド(日本のため池)のようなものを目にしたことは無かった。資本蓄積の脆弱性によるものか、土地の所有形態によるものか、他の理由によるものか、よく理解できない。ナムソン河には豊富な水量がある。雨季には有り余る水がある。灌漑施設を整備して水の確保をはかること。そして、その有効利用を図ること。これだけの蓄積された地域農業の生産体制がある中へ水が導入されると、それだけで地域農業は穀物などの土地利用型作物の土地生産性の増大に留まらず、商品生産農業への多様化を伴いながら飛躍的その生産力を拡大するものと思える。加えて、一層の生産体制の再編とマーケティング(都市部への人口集中の始まりと道路などのインフラ整備を見ると、その条件は生まれている)とそれを実現する起業精神に富んだオルガナイザーが地域のラオス人の中から出現することである。